

戦後教育史に見る「不易と流行」

—そのTOP3

9人の先生にお聞きしました

(アイウエオ順)

三つの「総合性」論の深化発展を

臼井 嘉一 ● 福島大学教授

「不易」と「流行」は戦後教育史においてどのように現れていたのでしょうか。ここでは教育実践・カリキュラム構成という観点から見ての「不易」と「流行」について述べて見る。

その点でカリキュラム理論としての「総合性」論の流行について述べて見るが、まず第一に一九五〇年代の「コア・カリキュラム論」、第二に一九七〇年代の「合科カリキュラム論」、第三に今日（二〇〇〇年代）の「総合的な学習の時間論」という三つをあげることができ

る。いずれの「総合性」論も、個々の教科の系統性や科学性重視の観点というよりは、全体構成のあり方や現代社会や子どもにとつてのカリキュラムの教育的なあり方を重視するものである。これらの「流行」の意味を正しくとらえるとともに、カリキュラム構造論を踏まえた教科論の再構成も課題となる。

不易も流行？

—変化しないのは何？

馬居 政幸 ● 静岡大学教授

変化するのが流行なら、不易はその逆のはず。だが、編集部の依頼は、戦後教育史から「不易と流行」を三種あげよ。この問いの前提は、不易にも流行があるということではないか。

これは皮肉ではない。いかなる理念も歴史的、社会的相対性を免れない。まして変化が常態化した現代社会では不易の内容やその具体化の方法自体が変化、すなわち流行となることを示唆する問いととらえたい。

とすれば不易はないのか。否。少なくとも戦後教育という時空での変化する流行のパターン（構造）は不易に近い。その代表を三点あげたい。

① 子ども主体 vs 教師主導
② 活動・体験中心 vs 知識教授優先
③ 個性重視 vs 基礎・基本強調
もう一つの不易は、三つとも前者から後者に移動すること。そして今、流行の振り子は後者に向いていないか。

目標と方法でとらえよう

押谷 由夫 ● 文部省初等・小学校課教科調査官

教育における不易と流行は、目標と方法の関係で考えてみると分かりよい。目標は不易の部分、方法は流行の部分である。方法は常に目標によって規定される。つまり、流行は不易が基盤になければならず、そのことによつて流行のなかに不易なものが見えてくるのである。

戦後教育の目標である、子どもたちの人格形成は、最も基本とすべき不易の部分である。そしてまた、人格の基盤に道徳性があることも不易である。そのことをどのように追い求めていくか。ここに流行が入り込む。

戦後の教育の大きな論争点は、道徳教育をどうするかであった。学校教育の全面で行うのか、さらに特設の時間を設けて行うのか。流行の部分で様々な論が展開された。そして、流行の中に見いだせる不易が検討され、全面で行うことを前提とし、それらを補充、深化、統合する道徳の時間が特設された。今度はこれを不易として流行が提案されねばならないのに、この認識に時間がかかりすぎた。それが今日の教育の混乱をもたらしているように思えてならない。

戦後教育史に見る「不易と流行」

—そのTOP3

9人の先生にお聞きしました

(アイウエオ順)

「不易」も「流行」も信用しない

下村 哲夫 ● 早稲田大学教授

有為転変の中に、不易と流行のあることは誰しも疑わない。この昔ながらの箴言がにわかに教育界の脚光を浴びたのは、先年の臨教審以来である。それから講演や雑誌論文で、幾度この言葉を耳にしたことがか。

「不易に泥まず、流行に流されず」は、確かに賢人の生き方だろう。しかし、大戦を経験した私は、「鬼畜米英」が一夜にして「占領軍のお兄さん」に変わり、毎朝の「東方礼拝」が米国礼賛に変わったとたんに、世の中に「不易」なものなど存在しないことを知った。

戦後五〇余年、教育界にも様々な流行が通り過ぎた。

私は「不易」の存在を信用しないと同時に、およそ「流行」なるものをも信用しない。

「知・徳・体」のゆらぎ

星村 平和 ● 帝京大学文学部教授

教育における不易と流行から連想される言葉を三つ挙げるとすると、知・徳・体ということになる。この三つは、もともと教育における不易にかかわる語とされているが、その実態は、戦後教育史のなかでさまざまにゆれ動いている。臨教審が、その調和的発達を求めたのも、このこととかわらう。

知については、社会の変化のなかで、自己教育力、新しい学力観、生きる力というようにその見直しが続き、遂にはこの五月、「教養教育」が新しいテーマとして登場するゆれぶりである。

徳の場合は、常に論争の対象であり、価値の多元化や時の課題とのかかわりで、不易として固まり難い状況にある。

体は、西欧における必修教科化が帝国主義時代の軍事的にあり、わが国もその影響を受けて成り立っているだけに、体位、体力論、武道のあり方、スポーツ振興等、論争が絶えない。

児童中心主義の落とし穴

牧 昌見 ● 聖徳大学教授

戦後教育史を特徴づける不易なものは、一口でいえば児童中心主義であるといえる。子どもの興味・関心、個性・適性の重視は教育の原理である。第二次大戦前への反省をふまえ、戦後教育改革を特徴づけた児童中心主義が、一部の実践を除いてプロバガンダに終わってしまったような気がする。

もつとも用語よりも内実が問題である。「生きる力」にしても同じであるが、その際、教師や学校の役割が同時進行で論議されなかったところに反省すべき点がある。一部に児童中心主義の故に子ども委せ、放任主義の風潮を正当化したとの観測がある。戦後教育の反省としてやり玉にあげられるのはこのためであろう。基礎・基本の徹底との対立概念とらえる傾向があるのも児童中心主義の誤解に一因がある。親も社会も落とし穴にはまった。残念だ、で済まされない問題である。

教育論の不易と流行

：見極めの着眼点

連載講座

▼紙張4／連載…日本の伝統行事・ルーツ話「神無月（かなづき）」＊7／柴崎直人 ▼表紙3・4／読み切り連載…わが校の卒業アルバム…その今昔…深海龍夫（解説・写真構成）…東京都渋谷区立千駄谷小学校

●連載／戦後教育の歩みを再検討する・7

大学改革と教員養成……………貝塚茂樹60

●連載／子どもに必須アイテム 10月のライフスキルトレーニング・7

私のことは私が決める——意志決定のスキルPart2……………皆川興栄62

●連載／韓国教師が体験した「日本の文化・日本の教育」・7

韓国の学校・家庭教育と韓国は日本をどう見ているか……………李政基64

●連載／学校白書づくりのススめ アメリカの事例紹介・7

特色ある学校づくりに役立てる（その2）……………葉養正明66

●連載／校門を出た中学生と付き合う——『中学生日記』制作ノートから・7

不登校を生きる二重の苦しみ—14歳の少女の心を見つめて——大前多恵68

●連載／「学校評議員制」——こう立ち上げる・7

新しいネットの張り方——おやじの会——……………吉野勇次70

●リレー連載／ダイアリー・10月／教務主任の仕事・7

会議は短く能率的に行おう！……………大島英明72

文教ニュース 教育改革国民会議が分科会報告／幼稚園教育で専門家会合が報告 II 教育情報センター／安達拓二……74

●教育用語に見る今の時代の流行／の見極め方		今後どうなるか	
地方分権化	野口克海……40	性教育	高橋史朗……48
学校選択の自由化	菱村幸彦……41	学級崩壊	高旗正人……49
インターネット化	堀田龍也……42	ポートフォリオ	高旗玲治……50
総合的学習	片上素子……43	学校カウンセリング	嶋田洋徳……51
●一時の流行と時代を囲むもの／真面目を鑑定する目玉は			
言説の先と後を多角的に見る……向山 行雄	52	言葉の背後の真実をつかむ……小林敢治郎	55
見えるか「教科の本質」と「学び方」……宮田 忠雄	53	時代を貫く理念と社会の風……根本 正雄	56
不易と流行の区分は誤り……大森 修	54		
教育界の流行語…敏感度をチェックしてみませんか		……………明石 要一	
——流行語から見るこれからの教育の課題——			

[illegible]